

小-6

外科療法を実施した肥満細胞腫罹患犬における血漿ヒスタミン濃度の動態について

○丹羽昭博¹⁾ 坂口鷹子²⁾ 遠藤能史^{1,3)} 廉澤 剛^{1,3)}

1) 酪農大附属動物医療センター 2) モノリス 3) 酪農大伴侶動物医療学

【はじめに】犬の肥満細胞腫（MCT）は、周囲組織への浸潤性や、所属リンパ節や皮膚を中心とした全身への転移も高頻度で認められる。また腫瘍随伴症候群として高ヒスタミン血症が要因となり、消化器徴候や出血徴候などを示すことが多い。以前の報告では、カルシウムイオノフォア刺激によるヒスタミン放出は転移の存在を示唆することを示した。外科侵襲もヒスタミン放出の原因になるため、これに対応すると考えられた。このため、手術後の血漿ヒスタミン濃度（PHC）が有用な残存病変のマーカーにならないかと考え、調査した。

【材料および方法】2010年7月～2016年5月までに酪農学園大学附属動物医療センターを受診し、MCTと診断され外科療法を実施した症例のうち、術前と術後30日以内にPHCを測定している犬の8症例（合計9回の外科療法）を対象としPHCの動態、残存病変の有無などを調査した。

【成績】4症例（5回の外科療法）で術後1日にPHCを測定していた。残り4症例は術後2、5、15、22日に術後最初のPHCを測定していた。術後に残存病変を認めたのは3症例（4回の外科療法）であり、残存病変の認められなかったのは5症例であった。残存病変が認められた3症例（4回の外科療法）において、術後すぐのPHCは3.5 ng/ml（術後1日）、0.9 ng/ml（術後1日）、0.68 ng/ml（術後5日）、0.29 ng/ml（術後22日）であった。経時的にPHC測定を実施していた症例では、その後、数日かけて徐々にPHCが低下していく様子も観察された。また残存病変が認められなかった5症例において、術後のPHCは0.36 ng/ml（術後1日）、0.15 ng/ml（術後1日）、0.11 ng/ml（術後1日）、0.21 ng/ml（術後2日）、0.14 ng/ml（術後15日）であった。

【考察】ヒスタミンは半減期が20分程度とされており、完全にMCTを切除すれば速やかにPHCは低下すると考えられる。実際、術後に残存病変が認められなかった症例の術後1～2日でのPHCは低値であった。術後翌日からのPHC測定は、摘出した組織から放出されたヒスタミンではなく、残存病変から放出されたヒスタミンを測定していると考えられ、術後翌日からのPHCが高値を示す場合、残存病変を有する可能性が考えられた。また、その後徐々に低下していくPHCの動態も観察されており、術後翌日から経時的にPHCを測定することは残存病変のマーカーとして有用であると考えられた。